

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02803

研究課題名(和文) 非定形節における発音されない主語の意味解釈の研究

研究課題名(英文) A Study on Semantic Interpretation of Unpronounced Subjects in Nonfinite Clauses

研究代表者

島 越郎 (Shima, Etsuro)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：50302063

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、非定形節内の発音されない主語とその先行詞との関係であるコントロール現象について考察した。具体的には、「非定形節における発音されない主語は、統語構造が意味解釈部門に転送される段階で同一の転送領域内に先行詞が存在する場合、その変項として解釈されるが、存在しない場合、変項の値は自由変項となる」という条件を提案した。この条件と非定形節はフェーズではないと仮定することにより、非定形節が動詞の目的語や副詞節として生じた場合、非定形節を直接支配する定形節内の項が非定形節の主語の先行詞として解釈されるが、非定形節が主語として生じた場合は同様の制限が課せられないという事実を説明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

不定詞節などの非定形節には発音されない主語が存在し、その解釈は非定形節が生起する統語位置により異なることが知られている。生成文法では、このような発音されない主語とその先行詞との関係をコントロールと呼び、コントロール関係を定めるメカニズムを明らかにすることが重要な問題の一つになっている。この問題に対して、i)非定形節内の主語を削除する分析、ii)非定形節内に発音されない代名詞を仮定する分析、iii)非定形節内の発音されない主語を主節に移動させる分析、等がこれまでに提案されてきた。本研究では、これらの先行分析の問題点を指摘し、非定形節内の発音されない主語の意味解釈に関する新たな分析を提示した。

研究成果の概要(英文)：Missing subjects of nonfinite clauses display different properties, depending upon syntactic positions of those clauses. When they appear in complements of verbs or as adjuncts, their subjects are interpreted as arguments of the clauses immediately containing the nonfinite clauses. In contrast, if nonfinite clauses appear as subjects, the antecedents of their subjects need not be grammatical elements: they can be interpreted contextually or generically. In generative grammar, the dependency between missing subjects and their antecedents is called control and various approaches to control have been proposed. In this project, I will propose the control theory that determines interpretation of missing subjects of nonfinite clauses within the framework of Chomsky's (2000, 2001) phase-based theory of syntax. The proposed analysis claims that missing subjects of nonfinite clauses are variables that must find their antecedents as soon as phases have been formed in the course of derivations.

研究分野：生成文法に基づく統語論と意味論のインターフェイス

キーワード：コントロール PRO 変項 フェイズ 非定形節 発音されない主語

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

不定詞節などの非定形節には発音されない主語が存在し、その解釈は非定形節が生起する統語位置により異なることが知られている。生成文法では、このような発音されない主語とその先行詞との関係をコントロールと呼び、コントロール関係を決めるメカニズムを明らかにすることが重要な問題の一つになっている。

### 2. 研究の目的

このような研究状況を踏まえ、本研究では、非定形節内の発音されない主語の意味解釈に関する新たな体系的理論の構築を目指す。具体的には、次の3つを研究目的とする。

- (1) 動詞の目的語として生起する非定形節内の発音されない主語の意味解釈メカニズムを明らかにする。
- (2) 理由や時などを表す副詞節として生起する非定形節内の発音されない主語の意味解釈メカニズムを明らかにする。
- (3) 主語の位置に生起する非定形節内の発音されない主語の意味解釈メカニズムを明らかにする。

### 3. 研究の方法

- (1) 非定形節を、動詞の目的語として生起する場合、副詞節として生起する場合、主語として生起する場合の3つに区分し、それぞれの非定形節における主語の解釈に見られる基本的特徴を明らかにする。
- (2) 非定形節の主語の解釈に関するこれらの基本的特徴が先行分析においてどのように、また、何処まで説明されているかを検証する。
- (3) 非定形節の発音されない主語の意味解釈を統一的に説明できる体系的理論を構築する。

### 4. 研究成果

#### (1) 説明すべきコントロール現象

動詞の目的語として生起する非定形節

- (i) a. John hated to nominate himself.  
b.\* Mary's colleagues hated to nominate herself.  
c.\* Mary realized that John hated to nominate herself.

文(ia)では、非定形節である不定詞節が動詞 hate の目的語として生起している。この場合、不定詞節を直接支配する定形節は文全体であり、文の主語である John が不定詞節の主語の先行詞として解釈される。その結果、不定詞節の主語を通じて John が男性形の再帰代名詞 ( reflexive ) である himself の先行詞となり、(ia)は許される。他方、(ib)では、女性形の再帰代名詞 herself は、Mary を先行詞に取らなければならない。しかし、(ib)における不定詞節を直接支配する定形節は文全体であり、文の主語である Mary's colleagues が不定詞節の主語の先行詞として解釈される。そのため、複数形の colleagues が herself の先行詞になれず、(ib)は非文となる。同様に、(ic)の不定詞節を直接支配する定形節は従属節であり、従属節の主語 John が不定詞節の主語の先行詞として解釈される。その結果、John は herself の先行詞になれず、(ic)も非文となる。

副詞節として生起する非定形節

- (ii) a. Our son should apologize after embarrassing himself.  
b.\* Our son should apologize after embarrassing ourselves.  
c.\* Mary thought that our son should apologize after embarrassing herself.

文(ia)では、時を表す動名詞 ( temporal gerund ) が副詞節として生起している。この場合、副詞節を直接支配する定形節は文全体であり、文の主語である our son が副詞節内の主語の先行詞として解釈される。その結果、副詞節内の主語を通じて our son が再帰代名詞 himself の先行詞となり、(ia)は許される。一方、(iib)では、ourselves は、our son ではなく、その一部である our を先行詞に取らなければならない。しかし、our は副詞節を直接支配する定形節である文全体の主語ではなく、副詞節内の主語の先行詞として解釈できない。その結果、副詞節内の主語を通じて our は ourselves の先行詞になることができず、(iib)は非文となる。同様に、(iic)では、再帰代名詞 herself は、our son ではなく、Mary を先行詞にとらなければならない。しかし、Mary は副詞節を直接支配する定形節の項ではない。副詞節を直接支配する定形節は従属節であり、従属節の主語 our son が副詞節内の主語の先行詞として解釈されるが、男性形の our son は herself の先行詞になれない。そのため、(iic)は非文となる。

## 主語として生起する非定形節

- (iii) a. We thought that to expose herself would help Mary.
- b. We thought that to expose ourselves would help Mary.
- c. To have to feed himself would assist John's development.

文(iii,a,b)では、不定詞節が従属節の主語として生起している。(iii,a)では、不定詞節を直接支配する定形節は従属節であり、その従属節の項である目的語の Mary が不定詞節の主語の先行詞として解釈される。一方、(iii,b)では、不定詞節を直接支配する従属節の項ではなく、主節の主語 We が不定詞節の主語の先行詞として解釈される。また、不定詞節が文全体の主語として生起する(iii,c)では、不定詞節を直接支配する定形節である文の目的語ではなく、目的語の一部である John が不定詞節の主語の先行詞として解釈される

### (2) フェイズに基づく解釈条件の提案

本研究では、非定形節の主語を発音されない変項(variable)として仮定し、その値は統語部門において構造を構築する際の単位となるフェイズに従って決まると考える。生成文法の最新モデルである極小主義プログラムの枠組みにおいては、統語構造はフェイズと呼ばれる CP と vP を単位に構築される。vP は動詞と目的語から成る動詞句で、また、CP は動詞句の上に位置する時制と補文標識から成る。CP や vP が形成された段階で、その一部が意味解釈部門である LF と音韻解釈部門である PF に順次転送される。非定形節の CP はフェイズを形成しないと仮定すると、非定形節内の CP とそれを選択する動詞句内の VP が一つの転送領域を形成することになる。この様なフェイズ理論の下、非定形節の主語位置に生起する変項の解釈条件として次を提案する。

#### 非定形節の主語の解釈条件

非定形節における発音されない主語は、統語構造が意味解釈部門に転送される段階で同一の転送領域内に先行詞が存在する場合、その変項として解釈される。同一の転送領域内に変項を束縛する要素が存在しない場合、変項の値は未指定のまま LF に転送される。

この解釈条件によると、非定形節の主語位置に生起する変項の値は派生の出来るだけ早い段階で決まるが、値が決まらなくとも派生は破綻しない。派生の途中で値が決まらなかった潜在項に対しては、派生の最後の段階で値が決まる。

### (3) 非定形節における主語の意味解釈の説明

上記の解釈条件を仮定した場合、非定形節が動詞の目的語として生起する場合、副詞節として生起する場合、主語として生起する場合の主語の解釈は次のように説明できる。

#### 動詞の目的語として生起する非定形節

文(ia)は、派生の段階で(ib)の構造を持つ。

- (i) a. John hated to nominate himself.
- b. [<sub>VP</sub> John v [<sub>VP</sub> hate [<sub>CP</sub> Op C [<sub>TP</sub> x<sub>1</sub> to [<sub>VP</sub> t<sub>1</sub> v [<sub>VP</sub> nominate himself]]]]]]]

構造(ib)は、主節の動詞句 vP が形成された段階である。主節動詞 hate が選択する CP の指定部には空演算子 Op が生起する。(ib)において、変項 x を含む転送領域は、不定詞節を形成する CP、TP、vP の先端(edge)以外に、主節の VP から成る。また、この転送領域内で変項 x は CP 指定部の Op により束縛され、Op の束縛代名詞として解釈される。そのため、転送後の LF において、CP 全体が  $\lambda x$ . [x nominate himself] という一項述語として解釈される。CP 自体は主節動詞 hate の補部に生起するため、hate の語彙特性により、この一項述語の主語は主節主語の John として解釈される。その結果、(ib)における不定詞節内の変項 x の先行詞は John となる。このように、非定形節が動詞の目的語として生起する場合、非定形節の主語である変項の先行詞は、必ず主節動詞の項となる。

#### 副詞節として生起する非定形節

文(ia)は、派生の段階で(iib)の構造を持つ。

- (ii) a. Our son should apologize after embarrassing himself.
- b. [<sub>CP</sub> C [<sub>TP</sub> our son<sub>1</sub> should [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>1</sub> apologize] [<sub>CP</sub> after [<sub>TP</sub> x<sub>2</sub> [<sub>T'</sub> -ing [<sub>VP</sub> t<sub>2</sub> embarrass himself]]]]]]]

構造(iib)では、副詞節を形成する CP が vP に付加し、主節主語の our son が vP 指定部から TP 指定部へ移動している。(iib)における変項 x を含む転送領域は、非定形節を形成する CP、TP、vP の先端に加え、主節 TP と主節 vP の先端から成る。この転送領域内において変項 x は主節主語の our son により束縛される。その結果、従属節内の動名詞の主語である変項 x は、主節主語 our

son の束縛代名詞として解釈される。

非定形節が主語として生起する場合  
文(iii)は、派生の段階で(iiib)の構造を持つ。

- (iii) a. We thought that to expose herself would help Mary.  
b.  $[_{CP} \text{that } [_{TP} [_{CP} C [_{TP} x_1 \text{to } [_{vP} t_1 v \text{expose herself}]]]_2 \text{would } [_{vP} t_2 v \text{help Mary}]]]$

構造(iiib)では、従属節内において、不定詞節を形成する CP が vP 指定部から TP 指定部に移動している。(iiib)における変項 x を含む転送領域は、不定詞節内の CP、TP、vP の先端に加え、従属節の TP と vP の先端から成る。この転送領域内に変項 x を束縛する要素は存在しない。その結果、転送後の LF において変項 x は自由変項として解釈される。変項 x の値は、文脈により同一節内の目的語 Mary と決まる。

### (3) 更なる帰結

更に、本研究は、非定形節の主語の解釈に見られる次の事実に対しても統一的説明を与えることが出来る。

#### 焦点化による解釈の多義性

副詞 only により焦点化された文中に生起する非定形節は、動詞の目的語や副詞節として生起する場合と主語として生起する場合では解釈が異なる。非定形節が主語として生起する文は多義的に解釈されるが、非定形節が動詞の目的語や副詞節として生起する文は一義的に解釈される。

#### 自己知的様相と事象様相

非定形節が動詞の目的語として生起した場合、非定形節の主語は自己知的様相 (de se) の解釈が与えられる。他方、非定形節が副詞節や主語として生起した場合、非定形節の主語は事象様相 (de re) の解釈を持つ。

#### 潜在項

動詞の目的語、副詞節、主語のいずれの位置に生起する非定形節の主語も、文中に生起しない潜在項 (implicit argument) を先行詞に取ることができる。

#### 部分的解釈と唯一的解釈

非定形節が動詞の目的語や主語として生起する場合、非定形節の主語は文中の先行詞の一部として部分的に解釈することができる。他方、非定形節が副詞節として生起する場合、非定形節の主語は文中の先行詞として唯一的に解釈される。

#### 副詞節に見られる恣意的解釈

非定形節が副詞節として主節の後に生起し、主節と従属節の間にポーズが置かれている場合、副詞節内の主語は、主節の主語を先行詞に取る解釈以外に、文中に生起しない任意の人を指す恣意的指示 (arbitrary reference) の解釈も持つ。また、副詞節が主節に先行する場合も、副詞節内の主語には恣意的指示の解釈が許される。

#### 主語に見られる弱交差効果の消失

主語として生起する非定形節において、非定形節内の主語が発音される場合は弱交差 (Weak cross over) 効果が見られるが、非定形節内の主語が発音されない場合は弱交差効果が消失する。

### (4) 先行分析との比較

Manzini M. Rita (1983) "On Control and Control Theory", *Linguistic Inquiry* 14, 421-446.

Manzini は、非定形節の主語を発音されない照応形として分析している。照応形は束縛条件 A に従い、照応形を含む統率範疇内で束縛されなければならない。非定形節の主要部は時制素性や一致要素を持たない主要部であり、非定形節自体はその主語に対して統率範疇を形成しない。この場合、非定形節を含む上位の節内において非定形節の主語が束縛されると仮定する。この分析は、(3)の に示す非定形節の主語の解釈の特徴を説明できない。

Clark, Robin (1990) *Thematic Theory in Syntax and Interpretation*, Routledge, London.

Clark は、値が未指定の空演算子 (Null Operator (NO)) として分析している。NO が値を受け取るために、非定形節内の IP 指定部から CP 指定部に移動し、非定形節全体が一項述語を形成する。非定形節が動詞の目的語に位置する場合、目的語以外の動詞の項が一項述語である非定形節の主語となる。また、非定形節が副詞節の場合、構造上の関係を表す構成素統御により非定形節の主語が決まる。更に、非定形節が主語の場合、意味解釈部門において導入される演算子が非定形節の主語となる。この分析は、(3)の に示す、非定形節が副詞節として生起する場合の主語の解釈を説明できない。また、

(3)の 示す特徴も問題となる。

Hornstein, Norbert (1999) "Movement and Control," *Linguistic Inquiry* 30, 69-96.

Hornstein は、動詞の目的語や副詞節として生起する非定形節の主語は名詞句移動の痕跡として、また、主語に生起する非定形節の主語は空の代名詞 *pro* として分析している。具体的には、動詞の目的語に非定形節が生起する場合、非定形節の主語が上位の節の主語位置に移動できる。また、副詞節に非定形節が生起する場合も、非定形節の主語が上位の節の主語位置に横方向移動 (sideward movement) できる。他方、主語に非定形節が生起する場合、主語条件 (the Subject Condition) に違反するため、非定形節の主語は上位の節に移動できない。その結果、主語に生起する非定形節の主語は発音されない代名詞 *pro* となる。この分析は、(3)の や における非定形節の主語の解釈の特徴を説明できない。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 島 越郎	4. 巻 36
2. 論文標題 フェイズに基づくコントロール理論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 162-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島 越郎	4. 巻 69
2. 論文標題 潜在項としてのPRO	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北大学文学研究科研究年報	6. 最初と最後の頁 201-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 島 越郎	4. 巻 68
2. 論文標題 コントロールの移動分析とその問題点	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北大学文学研究科研究年報	6. 最初と最後の頁 137-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島 越郎	4. 巻 67
2. 論文標題 コントロールとフェイズ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東北大学文学研究科研究年報	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 島 越郎
2. 発表標題 フェイズに基づくコントロール理論
3. 学会等名 日本英語学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----